第２章　４つの象徴世界と４つの位相

ここから先、チンラン、チョール、サール、ドゥキという4つの異人表象をたよりに象徴世界を描き出していくことになるが、各象徴世界が現在（調査時点）の人びとが生きる生活世界を構成する「位相のイメージ」としても捉えられることはすでに述べた通りである。ここでは、複数の象徴世界を概観しながら、それらが、実際どのような位相として現れるのか示したい。

その過程で、先にあげた4つ以外の異人表象が象徴世界に現れるのを確認する。本稿では、筆者に対する4つの異人表象を選び、その解釈をおこなうことで象徴世界とプラジャ・イメージを描き出すとしたが、各象徴世界には別の異人たちも潜んでいる。多様な異人たちと人びとが行き交う場として各象徴世界を描き出すことは、本稿とは異なる異人表象分析の可能性をもたらすだろう。

4つの象徴世界を概観したのち、相互の差異と社会的地位との関係について論じる。それによって本稿が世代、ジェンダーの問題を含んでいることが明らかになる。その後、多位相分析の方法について述べ、最後に従来の異人論と本稿との違いについて整理することで、本稿の立場をより明確にしつつ、その問題点を示す。

２－１．チンランの世界と位相

まず、第二部第1章で描き出されるチンランの世界がどのようなものとなるのか、概観しよう。

チンランとは人喰い鬼とでも言える存在である。チンランは、日常の物語や神話のなかで頻繁に登場する。そのチンランとともに必ず現れ、また想像されるのは「肉」である。そこで、本稿の第二部では象徴世界を抽出していくために、「肉」が人びとの生活のどのような場面で登場し、あるいは語られ、そのなかでどのように「切断＝接続」されているのか、具体的な資料から検討されていくことになる。

「肉」が人びとの生活のなかで頻繁に語られるのは狩猟について話されるときである。そこで、まずそのような狩猟の際、動物たちと人間との関係がどのように捉えられるのかが検討される。動物は狩られ、あるいは捕らわれ「肉」に「切断」されたあと、人間たちによって分配、「接続」される。特にブタ肉は結婚の際「切断」されて、姻戚と父系の親族のあいだで交換（相互に「切断＝接続」）され「娘が肉を持ってくる」と象徴的に語られる。そのような姻戚と父系親族の論理はどのようなものなのか、ついで検討されることになる。また、父系概念を支える所有と相続の問題も分析され、さらに父系親族が基本単位になっておこなわれる祖先霊たちを祀る儀礼の内容も検討される。そこで、超自然的な存在がいる異界はどのようなものなのか、そしてそのような超自然的存在と人びとはどのような関係を取り結んでいるのかが明らかにされる。

ここで描かれるのは、動物と人との関係、そして肉の「切断＝接続」に関わる親族などの人間関係、人間と祖先霊などの超自然的存在との関係から成り立つ世界であり、これは「出自と縁組」[1]の位相とでも言える。

父系親族や結婚の論理が大きく展開するこの相には、「婚出者」「兄」そして結婚の外部としての「ショー」と言った異人が姿を現し、超自然的存在と結びつけられた「病人」という異人の姿も垣間見える。これらの異人表象も含めたかたちで、人びとの自己のあり方と象徴世界が描かれていくことになる。

2－2．チョールの世界と位相

つぎに、第三部第1章で記述されるチョールの世界の内容を確認する。

チョールとは、泥棒のことであり、それは政府が転覆し無政府状態になったときの記憶と結びつけられて語られる。ここでは、その転覆した政府はどのようなもので、人びとはそれとどのような関係を結んでいたのかが、まず検討される。そして、それが専制的な国家体制であり、その媒介として人びとは村内に定められた徴税役を抱えていたことが示される。

つぎに「チョールが沢山いた場所」として語られる「森」と人びととの生活の関わりについて触れた上で、その「森」がどのようなかたちで維持されてきたのかが、明らかにされる。そして「森」が登場する神話が取り上げられる。それは、ネパール語で語られヒンドゥーの神やブラーマンが登場する、ネパール的、ヒンドゥー的な神話である。そうしたヒンドゥー的な神話は、現在に繋がるネパールという国家が成立し、統治原理にカースト制度を含めたヒンドゥー的要素が組み込まれた時代にサンスクリットからネパール語に積極的に翻訳された経緯がある。当時のネパールで国家と関わりを持つということは、ヒンドゥー的な世界のなかで自らを位置づけることだったと考えられる。こうした経緯も踏まえ、人びとのこれらの神話における位置づけ、その受容のあり方を検討することで、ヒンドゥー的なものや国家的なものとの関わりがこの世界では描かれる。ここに見られるのは、「専制国家」との関係とでも言える位相である。ここでは、「野蛮人」や「未開人」とでも言える異民族が登場し、「プラジャ」から「排除」される。「未開人」はこの象徴世界が生み出す外部でもある。このようにチョールの象徴世界を描くということは、同時に「未開人」の象徴世界を描くことでもある。

2－3．サールの世界と位相

第三部第2章で取り上げられるサールとは、先生とでも訳すことのできる敬称である。それは主に学校の教師、開発スタッフ、政治家などに対して用いられる。

ここでは、まず学校設立がどのようなものだったのか、人びとの記憶を辿って世界が記述される。さらに1951年民主化とその後のパンチャーヤット制度の開始、そして1990年以降の多数政党制の導入という政治制度の変化が、人びとにどのように受け入れられたのか、やはり人びとの記憶と筆者の観察とを合わせて描かれる。また、1960年前後からの開発計画がもたらした周辺地域の変化、人びと自身も開発の対象とされた経験、そしてこれら開発が継続される現状に対する語りも取り上げ、こうした開発の問題との関連で世界が描写される。

このような内容を持った世界は「国民国家、開発」との関係の位相と言えるだろう。

1960年代から80年代までのパンチャーヤット制度の国家を国民国家と呼べるかどうかというのは判断が分かれるところだが、その制度下では、教育制度の導入と合わせて国民主権を訴え、選挙も導入されているところから、とりあえずそう呼ぶことにする。

なお、開発により街やバザールができ、「街の人」や「商人」がM村の近隣で目につくようになり、人びとはそうした異人について頻繁に語るようになっている。これらの異人表象もこの象徴世界、位相の存在として位置づけることができる。

2－4．ドゥキの世界と位相

最後に第三部第３章で描かれるドゥキの世界である。

苦労人や苦痛に耐える人とでも言える意味を持つ、このドゥキの世界は、他の象徴世界とは異なった位置づけのものとなる。それは、ふたつの点でドゥキという表象が他の異人表象と異なっているからである。

まず、第一に、ドゥキだけは他とは異なり、複数の人ではなく、ヒラ氏のみによる、つまり個人による表象であること。第二に、ドゥキが、他者を排除したり、他者と一定の距離を置いたりするときではなく、自らのうちに受け入れる際の表象であるため、異人表象とは言い切れない、ということがある。ここまで、異人に与えられた表象であり、マージナル・マンとして理解できることから異人表象としてきたが、実際にはドゥキは多様な側面を持った複雑な表象である。

個人による表象、いうことは、個人的な問題が背景に想定できる、ということである。その意味で、この象徴世界の風景は、他と大きく異なったものになる。しかし、同時に個人の問題に収まらない可能性も秘めている。ヒラ氏以外、特に同年配の男性も筆者をドゥキとして捉えていたかもしれないからである。そこで、この世界では、まずその可能性が問われることになる。

他の象徴世界のように、ドゥキという言葉が登場する人びとの語りを見ていくと、それが開発やサールとの関連で語られており、サールの世界と同等の世界をかたちづくることがわかる。そのようなドゥキの捉え方でいくと、「開発が進んだ国から来た」と言われる筆者はドゥキではなく、むしろ、その対極に位置づけられ、矛盾を来すことになる。結局、ドゥキを一般的な語用から解釈する可能性は閉ざされ、ヒラ氏の個人的な文脈に注目することになる。

「行商人」など村を訪れる多くの人びとのなかで、ヒラ氏が受け入れた人たちは、筆者を含め「最後に残された者」とでも言える人びとである。そこで、ヒラ氏が「最後に残された者」を受け入れた理由を、彼の日常的な行動傾向や彼の少年時代、開発に関わる問題で彼の身に起こった出来事などから彼のパーソナリティや心理状態を分析し、探ることになる。

その過程で第二の問題が浮かび上がる。彼が「最後に残された者」へ手を差し伸べる理由を検討するなかで、ヒラ氏が同じドゥキとして共感を持っていた可能性と、マージナルな異人に何かを期待していた可能性が生じるからである。

そのような二つの可能性に留まった「個人の経験」の位相がドゥキの象徴世界として描かれるが、最後にヒラ氏のような開発との関わりや、開発への対処が多くの人び

とと共有されていることを示すことで、この象徴世界は「個人の経験」から多くの人に開かれた「開発以降の生活」の位相となる。

2－5．4つの位相間の関係

このように4つの象徴世界を概観すると、それぞれが「プラジャ」を名乗る人びとの生活世界の「出自と縁組」、「専制国家との関係の記憶」、「国民国家と開発の記憶」、「個人の経験」あるいは「開発以降」とでも呼べる位相を形成していることがわかる。

それらの中身をよく見ると、人びとの過去の記憶がそこに織り込まれることによって、「国家との関わりがはっきりしない伝統的共同体の位相」から「専制国家と関わる位相」へ、そこから「国民国家や開発と関わる位相」、さらに「開発以降の生活の位相」へという歴史的な流れのなかの時代区分として読み取れることに気がつく。だが、それらは実証的な意味での歴史を構成するわけではない。

確かに、これらの位相、象徴世界は、特定の時代区分として、そのような「プラジャ」を名乗る人びとと国家との関わりの歴史を構成しているように見える。だが、4つの位相、象徴世界は、あくまで共時的な異人表象を起点として描き出される、共時的な生活の相である。

では、その位相間の差異は、どのようなものとして捉えることができるのだろうか。その表象行為の主体に目を向けたとき、浮かび上がるのは世代やジェンダーなど、社会的な地位に関する差異の問題である。チンランとチョールと表象したのは、年配者や子供、幅広い世代の女性、サールのときには学歴の高い若い男性、ドゥキは中年の男性であるヒラ氏という個人であった。ここから、「出自と縁組の象徴世界」と「伝統的共同体の位相」、「専制国家との関係の位相」であるチンランとチョールの世界は、年配の男女と子供世代、全体的に男性よりも女性により深く関わるものであり、「国民国家と開発の位相」であるサールの世界は、若い男性や学歴の高い存在、「開発以降の位相」や「個人の経験」の位相であるドゥキの世界は中年の男性やヒラ氏という個人が強い関わりを持つ、と言える。このように、社会的な地位によって、人びとの生活の位相が異なっている、ということが可能である。

他方で、それぞれ各異人表象は一定の範囲の人びとのあいだで共有された記号としての性格を持つ。少なくともM村とその周辺で、4つの表象は記号として共有されているため、その記号を用いる人びとは、そこから描かれた象徴世界、位相を共有していると理解することも可能である。

このように表象の差異から、自己表象をおこなわないまま「プラジャ」を名乗る人びとを、社会的地位に即して分割して理解することが可能であり、同時に人びとを同一的に扱うことも可能である。そうした分割された「プラジャ」と同一的な「プラジャ」は、どちらか判然としないまま、宙づりになった状態に留まる。

だが、そのまま記述を止めてしまうわけではない。すでに述べたように、共時的な性格を持つ4つの象徴世界は、時代とは異なることは確かである。しかし、複数の象徴世界が接続されることで、歴史的な意識が構成される可能性はある。そして、その可能性は、別の象徴世界同士の接続にも開かれたものである。

そこで本稿では、この4つの象徴世界を描き出し、そうした象徴世界、位相内の「プラジャの存在イメージ（位相内の微細な位相を結びつける「主体としてのプラジャのイメージ」を含んだもの）」を抽出したうえで、各位相をそれぞれが内包するイメージの形態的な同一性により様々な方向に接続し、歴史的な意識、つまり、通時的な「主体としてのプラジャのイメージ」の形成可能性を探っていくことにしたい。

その過程で、4つの象徴世界は相互に結びつけられながら内包的な空間をつくりだしていくが、それには外部が入り込む余地はあるのか、それともないのか。多位相分析をおこなうなかで生じるある種の限界状況を取り上げ、検討する。

本稿は、従来のエスニシティ論とは異なり、表象以前の自己イメージの潜在的可能性を扱う。それはスミスのナショナリズムについての議論や箭内の文化の生成論とも重なった議論となる。以下では、人びとの生活を4つの位相に分割、つまり切断し、その接続の道を探っていくが、人びと自身による異人表象がその切断の起点となっている点で従来のスミスや箭内の議論とは異なっている。結論では、そうした「異人論」の接続が、新たにどのような可能性を開くのかについても検討する。

2－6．「異人論」と自己イメージ論

さて、これでプラジャの象徴世界と自己イメージの潜在的可能性を分析する準備は整った。だが、その前に、一点だけ確認しておきたい。本稿はエスニシティについての関心から始まったが、「異人論」とも深い関わりを持っている。そこで、本稿がこれまでの「異人論」とどのように異なっているのか、これから分析を進める前に見極めておきたい。それによって、本稿の議論の方向性をより明確なものとし、異人についての記述を進める上での課題をあげておきたい。

ここまでは、赤坂の議論を中心に参照してきたが、各論としての「異人論」として、人類学の業績からはMichael Taussigにより1980年に出版された著書*The Devil and Commodity Fetishism in South America*をあげられる。

Taussigは、そのなかでプランテーションや鉱山の労働者に組み込まれた南アメリカの元農民の民間伝承に見られる「悪魔」に注目し、マルクス理論から分析を進め議論を展開している。そこでは「悪魔」と資本主義による商品フェティシズムとの関係が探られ、植民地主義的侵略やキリスト教の展開、そして資本主義経済の進展により抑圧され、プロレタリア化した人びとがそれらに対して適応、抵抗するなかで、その「悪魔」を成長させてきたことが示される。

このTaussigの議論は、「悪魔」という異人表象の解釈によって労働者たちの象徴世界と資本主義に抵抗する姿を鮮やかに描き出した魅力的な議論である。本稿（特に「開発の位相」の抽出）にとって、象徴の創造を資本主義に対する適応や抵抗として読み取っていくその視点は、大変参考になる。しかし、もともと農民は市場経済に組み込まれており、市場経済との関係、つまり資本主義的な商品化は、元農民にとって異質なものとして問題になっているわけではない、という批判がTaussigの議論に対して寄せられている（Harris 1989, Parry and Block 1989）。こうした批判が生じる理由としては、様々な解釈が可能だが、本稿の立場から見れば、Taussigの議論が、単系的な歴史を描くことになっているのが問題に繋がっているように見える。本稿は、

共時的な複数の位相の相互接続によって、複数の「歴史の可能性」を追っていく点でTaussigの議論と異なっている。

日本の民俗学研究で「異人論」と言えば、小松の『異人論』（1995 （1985））や『悪霊論』（1997（1989））、妖怪や鬼に関する論攷（小松 1992, 2000）などを誰もが真っ先にあげるだろう。すでに見たように、筆者と小松とでは秩序原理の捉え方にズレがあるが、それ以外に何が重なり、何が異なっているのか。

小松は、様々な異人についての調査研究を展開することで「民俗社会の心性」について考察を深めたいとしている。彼の言う「民俗社会の心性」と本稿で言う「民族的な自己イメージ」とでは表現が異なっているが、目指しているものは、非常に近いと言える。

だが、彼がそこで採用する方法と筆者の方法とのあいだには、微妙な違いがあるのも事実である。異人から世界を想像する道筋が異なっているのである。ただし、ここで小松の広範に渡る議論をまとめ、その細部について一々検討する余裕はないので、本稿の方法と彼の「異人論」のなかの中心的議論である「異人殺しのフォークロア」の方法論との違いを指摘しておきたい。

小松は『異人論』のなかで、「異人殺し」に関する伝承を東北から九州に至る日本各地に渡って渉猟している。こうした場合、ともすると無批判に日本人一般を想定した議論に繋がりかねないが[2]、小松はそうした論理展開を意識的に避け、伝承を整理分類しつつ、それが時代によって、また語り手の立場によって変化している事実を見出していく。一例をあげれば、中世の「異人殺し」は「人身御供」であったが、近世にはそれが「貨幣殺し」の様相に変わった（小松 1997：58-74）という具合にである。そして、その歴史的背景を探り、この場合は近世の貨幣経済の浸透、村落共同体解体の不安、外部の貨幣と繋がりを持った特定の家への妬みがあることを指摘する。

このような小松の議論は、Taussig同様歴史的な記述となっており、「歴史の可能性」に繋がる議論をおこなう本稿とは異なっている。また、小松は、ある特定の異人表象や異人がらみの伝承に注目して、そのヴァリエーションを広範な地域から蒐集し、その差異のなかから民俗の心性の差異を探るが、そのような作業は本稿ではおこなわれない。したがって、本稿は安易な「プラジャの心性」一般論やナショナリズム的言説に陥ってしまう危険性を抱えていることがわかる。

一方、小松は「民俗社会の心性」の地域的な差異、歴史的な差異を重視し、広範な資料を必要とするため、自らの現地調査によって得られた生活資料を中心に論を展開するには限界がある。『異人論』では、そういった生活資料も取り上げられるものの、小松はその掘り起こしを目指しているわけではない。小松はこの点に無自覚なわけではないが、実質的には歴史家による資料に頼る部分が大きくなっている[3]。

本稿のこれから先の議論では、特定の異人に与えられている表象のヴァリエーションに注目し、その表象を支える人びとの今日における生活の様々な側面を現地資料から掘り起こすことで、可能な限り丹念に人びとが生きる世界を描きあげていくことを重要視している。小松の立場は、その歴史的な解釈の変遷を含めた神話学、民間伝承学と言えるが、筆者の議論の重心は、あくまで現地調査の資料に基づきプラジャの人びとの自己イメージの潜在的可能性を広げることにあり、それは結果として民族誌的記述を充実させることになるはずである。本稿は「象徴世界」や「自己の存在イメー

ジ」「主体としての自己（のイメージ）」を分析概念として用いる、ネパールのある「民族」の生活の様々な位相を扱う綜合的な「民族誌」である。

従来の「異人論」の議論と本稿とを比べることで、本稿が、実証的な歴史記述ではなく、位相間相互の関係を複数探り、「歴史の可能性」を描き出すことを重視している点が明確になった。さらに本稿が、現在を生きる人びとの生活の経験を重視するものの、異人表象の地域的、歴史的多様性に対する目配せができていないために、安易な「民族の心性」一般論やナショナリズム的言説に回収されてしまう危険性を抱えること問題も明らかになった。この点には注意しておきたい。

注

[1] ここでは「出自」という語を、祖先霊など具体的な系譜が辿れない存在との関係も含めた起源から通時的に結ばれたイメージで捉えられる人間関係、という広い意味で用いている。同様に「縁組」も、具体的な婚姻関係が確認できなくても共時的に結ばれたイメージで捉えられる人間関係、として用いている。

[2] 小松は「鬼」についての編著（小松 2000）でも、折口信夫の「春来る鬼」以降、資料に基づくことなく起源としての「おに」が民俗学の世界でイメージされてきたことを批判し、個別的な鬼の文化史構築の重要性を論じている。

[3] 小松（1995（1985））は人類学者や民俗学者も歴史資料を蒐集していくべきだとしている。